

〈論文〉

深澤英雄のライフヒストリー研究(Ⅰ)

—— デモシカ教師としての出発から教育実践の「定型」の確立へ ——

The Life-historical Approach to Hideo FUKAZAWA(Ⅰ)

—— From starting as a demoshika teacher to establishing the “standard” of educational practice ——

船 越 勝 深 澤 英 雄
 FUNAGOSHI Masaru FUKAZAWA Hideo
 (教育学教室) (教育学部非常勤講師)

2023年11月13日受理

Abstract

Hideo Fukazawa, an elementary school teacher in Kobe City, further developed the educational materials and class management methods developed by Hiroshi Kishimoto. Based on life history research of teachers, we will investigate why Hideo Fukazawa was able to become such a powerful teacher.

キーワード：教師のライフヒストリー、学力、学力形成、授業づくり

I 問題の所在

優れた教師と言われる教師は、なぜそのような優れた教師になったのか。あるいは、なり得たのか。私たちは、戦後の教育実践史において、百ます計算などの教材の開発と習熟を重視した学力の基礎を鍛える教育方法の提起で、教育方法学研究や教育実践研究に大きな貢献をした実践家であり、研究者であった神戸市の小学校教師の岸本裕史とその継承・発展者と言われる久保齋を取り上げ、岸本裕史や久保齋は、なぜ岸本裕史や久保齋になったのか、さらにいえば、いかにして岸本裕史や久保齋になり得たのかについて、教師のライフヒストリー研究の方法論にもとづいて共同研究を行ってきた。

私たちはこうした成果を踏まえて、今回神戸市の小学校教師を永らく務めてきた深澤英雄を取り上げ、その教師としての生涯と力量形成の過程を解明するために、ライフヒストリー研究に取り組むことにした。その理由はいくつかある。第一に、私たちは、戦後の学力形成、学力づくりをテーマとした教育実践史において、深澤は、久保齋と並んで、岸本裕史の実践的成果や組織的役割を継承・発展させるポジションにあるが、同時に違いもある。久保は、先に『『内部の外部』、『内なる他者』ともいうべき性格』²⁾と表したことからわかるように、決して岸本との距離が身近であったという訳ではない。それに対して、深澤は、教員就職をした当初から、同じ神戸市の小学校教師ということもあり、サークル等を通して、日常的に学ぶ関係にあった。まさに「直系の愛弟子」ともいうべき位置にいる。こ

うした久保と深澤の岸本との距離の違いが、岸本の実践的成果などを継承・発展のさせ方にどのような違いを生んだのかということである。結論を先んじて言うと、こうした岸本との物理的・心理的な距離の近さに反比例して、岸本が開発した読み書き算という実践の枠を超えて、歴史研究論文の実践への挑戦や、森信三氏に由来する立腰教育や「しつけの三原則」の導入など、従来の「落ち研」の教育実践論にない内容を柔軟に導入していったところが、久保にない深澤の岸本の継承の仕方の大きな特徴ではないかと私たちは仮説的に考えている。「学力の基礎」といわれる基礎学力保障の教育実践論の系譜として深澤に着目する所以である。

第二は、深澤が後に見るように、香川大学農学部という非教員養成系学部出身ということである。戦後の教員養成史においては、戦前の師範学校出身の教師の教養の不十分さや型にはまった教師像など、「師範型」ということで、批判的に見られてきた³⁾。そして、そうした批判から、戦後の教員養成の原則として、大学における教員養成、開放性、法律主義などが掲げられてきた。つまり、非教員養成学部出身の教員養成の可能性に大きなスポットライトを当てたのが戦後の教員養成政策なのである。しかし、深澤の教師としてのスタートは、逆に、このような非教員養成学部出身の自分に対する否定的評価が強かった。こうした深澤の非教員養成学部出身の教員というアイデンティティや戦後の教員養成の原則である開放性の意義や可能性をどのように考えるかということである。

第三は、深澤の勤務地が神戸市であるという地域性

が持つ影響をどう考えるのかということである。久保の勤務先は、当時「西の文部省」と言われた革新自治体の京都市であり、労働組合を中心に、教職員の「教育の自由」が高く掲げられていた。しかし、神戸市は反対に、教職員に対する管理・統制が厳しいことで知られた地域である。こうした地域性は岸本の実践的成果などの継承・発展のパースペクティブにどのような影響を与えたのかが検討される必要がある。

このような問題意識と問いを持ちながら、順を追って、深澤英雄のライフヒストリーを検討していくことにしよう。なお、その際、本稿は共著者である深澤自身を研究対象とするが、深澤は自らを記述する際も客観的記述を行うように心がけた。また、インタビュー調査を丁寧に行い⁴⁾、その他の教育実践資料などの文献資料などと照らし合わせて、記述の客観性を担保した。(船越)

Ⅱ 深澤英雄のライフヒストリー

1. 深澤英雄のライフヒストリーをとらえる仮説と時期区分

深澤英雄のライフヒストリーを検討した場合、その

時期区分は、以下の通り6期に分けることができると、私たちは考えている。

- 第1期 誕生から大学時代までの学びと成長期 (1955年～1977年)
- 第2期 教師としての力量形成と模索期 (1977年～1984年)
- 第3期 教育実践の「定型」の成立期 (1984年～1997年)
- 第4期 教育実践の拡充・発展期 (1997年～2005年)
- 第5期 教師像の問い直し期 (2005年～2015年)
- 第6期 大学における教員養成と教師教育の実践期 (2015年～ 現在)

本稿では、深澤のライフヒストリーの前半生、すなわち、第1期から第3期までを対象にし、深澤の学力づくりを中心とした教育実践の発展と教師としての力量形成の過程を、深澤の具体的な教育実践資料とインタビュー調査をもとに分析することを試みる。(船越)

表 深澤英雄ライフヒストリー

時代区分	西暦	日本・世界の動き	年齢	ライフヒストリー	特徴的な体験とその要因・結果
第1期	1955		0	2月6日生まれ	昭和30年
	1956	小・中学校社会科改訂発表	1		
	1957	ソ連スポーツニク打ち上げ成功	2		
	1958		3		
	1959		4		
	1960		5	神戸市立楠幼稚園入園	
	1961	新日米安全保障条約調印 安保反対闘争	6	神戸市立東山小学校入学	
	1962	全国一斉学力調査実施	7		
	1963		8		
	1964		9		
	1965		10		
	1966	中教審「期待される人間像」発表	11		
	1967		12	神戸市立兵庫中学校入学	
	1968	教育内容の現代化	13		
	1969	小学校学習指導要領告示	14		
	1970	大阪万博 70年安保闘争	15	兵庫県立夢野台高校入学	
	1971	環境庁設置	16		
1972	学習指導要領全面実施全国教育研究所 発表「半数の子どもが授業についていけない」問題化	17			
1973	オイルショック 10月	18	香川大学農学部園芸学科入学		
1974		19			

時代区分	西暦	日本・世界の動き	年齢	ライフヒストリー	特徴的な体験とその要因・結果
第1期	1975	八鹿高校事件 ベトナム戦争終結	20		
	1976	主任制 公示	21		岸本裕史著『どの子も伸びる－教師と親でつくる教育－』発行 香川大学農学部園芸学科卒業 1977年3月
第2期	1977	「ゆとりの時間」新説	22	神戸市立有馬中学校助教諭 中学校 1年	数学を教える。基礎学力の大切さを知る
	1978	学習指導要領告示「ゆとりと充実」	23	神戸市立唐櫃小学校助教諭 3年	佛教大学通信教育部教育学科 入学
	1979		24	神戸市立唐櫃小学校教諭 4年	人生の師匠岸本裕史氏との出会い
	1980		25	5年	非行・校内暴力の広がり
	1981		26	6年	結婚 家族の愛情を知る 岸本裕史著『見える学力見えない学力』発行
	1982		27	神戸市立北野小学校教諭 5年	
	1983		28	6年	長女生まれる 親の子にける思いを感じる
第3期	1984		29	5年	関西落ちこぼれをなくす研究会交流集 会に参加
	1985	臨時教育審議会設置法公布	30	6年	学力の基礎を鍛え落ちこぼれをなくす 研究会(落ち研)設立に参加
	1986		31	神戸市立福住小学校教諭 4年	長男生まれる 子育ての楽しさと責任を知る
	1987		32	6年	
	1988	臨時教育審議会最終答申提出	33	4年	
	1989	「生活科」新設 学校週5日制導入	34	2年	
	1990	初任者研修制度開始	35	1年	
	1991		36	2年	
	1992	小・中学校の指導要領改訂 「新しい学力観」強調	37	3年	
	1993	学校週5日制 (毎月第2土曜日休み)スタート	38	神戸市立北五葉小学校教諭 4年	
	1994	阪神淡路大震災	39	5年	落ち研事務局長就任 8月全国大会に おいて。組織を動かす醍醐味と苦勞が 分かる。 1月17日午前5時46分 「命」の尊さを体験
	1995		40	6年	
	1996		41	5年	
1997		42	6年	6月28日少年A逮捕 その日に群読講 座に参加し家本芳郎先生と出会う。 8月 落ち研事務局長退任	
第4期	1998	学校週5日制の全面実施 「総合的な学習の時間」新設	43	4年	神戸歴史クラブ設立に参加。歴史的な 見方を学ぶ
	1999	学習指導要領告示	44	3年	
	2000	品川区教委公立小学校学校選択の自由 化決定	45	4年	

時代区分	西暦	日本・世界の動き	年齢	ライフヒストリー	特徴的な体験とその要因・結果
第4期	2001	教育改革国民会議 最終答申	46	神戸市立横尾小学校教諭 4年	「学力の基礎をきたえ落ちこぼれをなくす研究会(落ち研)」から「学力の基礎をきたえどの子も伸ばす研究会(学力研)」に名称変更
	2002		47	6年	堰八先生宅に通い始める。教育の広さ深さと自己を見つめる意味の教えを受ける。 『読みの力を確実につける』(明治図書)出版。 初めての単著。 日本群読教育の会発足に参加。群読の教育文化としての可能性を感じる
	2003	確かな学力の向上のための2002アピール 『学びのすすめ』	48	2年	『基礎基本「計算力」がつく本』小学校1・2・3年版、4・5・6年版(高文研)出版
	2004		49	3年	
第5期	2005		50	5年	学力研常任委員長就任 学力研の実践を知ってもらい広める仕事をする『どの子も伸びるさかのぼり指導のアイディア』(小学館)出版
	2006		51	初任研	家本芳郎氏 2月25日死去 岸本裕史氏12月26日 胆嚢癌で死去
	2007		52	3年	『岸本裕史 100マス先生の遺言』清風堂書店 出版 「すべての子どもに確かで豊かな学力」という岸本先生から託された思いを受け継ぐ
	2008	「外国語活動の時間」新設	53	神戸市立福田小学校教諭 5年	
	2009		54	4年	
	2010		55	5年	
	2011		56	5年	『つまずきと苦手がなくなる計算指導』清風堂書店 出版
	2012		57	神戸市立甲緑小学校教諭 2年	
	2013		58	5年	
	2014		59	5年	父 死去85歳
第6期	2015		60	神戸市小学校教員退職。和歌山大学教育学部大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)特任教授	
	2016		61		堰八正隆氏 4月20日死去
	2017		62		
	2018		63		『新・教師力20』(小学館)出版 和歌山大学教職大学院著『教師になる「教科書」』(小学館)出版
	2019		64	和歌山大学教育学部教職大学院 退任 和歌山大学教育学部 非常勤講師	教育方法学/教育課程・方法の理論と実践 担当
	2020		65		
	2021		66		現代教職論C 担当
	2022		67		
	2023		68		特別活動・教科外活動論A 担当
	2024		69		

(深澤)

2. 第1期 誕生から大学時代までの学びと成長期 (1955年～1977年)

(1) 幼小期の生活から高校まで

深澤英雄は、1955年(昭和30年)、神戸市兵庫区で生まれる。昭和30年代は、政治的には55年体制の確立と経済的には戦前の水準への回復実現によって戦後史の重要な区切りとなった時である。

深澤の生まれた地域は湊川商店街の近くだった。明治43年湊川の付け替え工事があり、新湊川が誕生した。旧湊川は埋め立てられ、河川堤防は削られて湊川新開地と呼ばれる土地が生まれた。北側は湊川商店街になり、南側は後に映画館や芝居小屋が集中する繁華街新開地として発展した。家族構成は、父は印刷会社に勤める会社員、母は専業主婦、長男として生まれ、2学年下の弟がいる。「ALWAYS 三丁目の夕日」の映画にあるような下町の風情が残る街だった。周りには、同世代の子どもも多く、路地や道路で、異年齢の仲間と遊び、近くの家同士の交流も多かった。

1960年4月に神戸市立楠幼稚園入園した。教師になった後に大きな影響を受けた、岸本裕史は、楠幼稚園に隣接する平野小学校の教諭として勤務していた。

1961年4月に神戸市立東山小学校に入学。児童数の増加により、1958年に開設した学校で、当時流行であった円柱形をした円形校舎が建てられていた。戦後の雰囲気が残っており、近くの小学校の壁はコータールで黒く塗られていた。空き地もあり放課後は友達と野球をしたり、裏山の烏原水源地で虫取りをして遊んだりしていた。

深澤は小児喘息があり、季節の変わり目にはよく体調をくずした。低学年の頃は、学校を欠席することが多かった。母親はしつけには厳しかったが、体のことを気遣い色々な治療を受けさせた。小学校3年生の時の担任の先生に受けた教育が教師になった時のモデルとなった。20代の若い先生で、クラスの児童から慕われる先生だった。休み時間は一緒に遊んだり、雪が降ると近くの公園で雪合戦をしたり、理科で水鉄砲を作ったあとに、水鉄砲を使っての対抗戦の遊びも行ってくれた。授業や生活の場面で写真を撮ってくれ、児童にプレゼントしていた。しかし、友達を馬鹿にするなど、いじめるようなことがある場合は、普段の先生とは違い烈火のごとく叱った。

父親は、休みの日には、弟と2人を川、海などへ釣りに連れてってくれ、自然への触れ合いを多くとってくれた。家には、魚や鳥、亀などを飼育し、生き物への関心があった。

1967年神戸市立兵庫中学校に入学。友人に誘われてテニス部に所属した。中学2年生の時、小児喘息の発作がでて、一時テニス部を休部した。その時に、植物栽培や観察会を実施していた部に入る。顧問の先生が自然観察に堪能な先生で、植物への関心を持つ。体調

はもどり3年からテニス部に復帰。友達から紹介されて、ビートルズやフォークソングの曲を知り、ギターにも興味を持った。

1970年4月兵庫県立夢野台高校入学。深澤は小学校の時から、漠然と「人の役に立つ仕事につきたい」と考えていた。具体的にはあまり定まらずに職業選択のビジョンが描けていなかった。母方の祖父が建設会社を経営していたので、建築など職人の世界、ものづくりの仕事を目撃していた。

高度経済成長のひずみとして、公害問題が頻発していた。神戸の街も、工業地帯の煙突から出る煙で大気汚染が深刻化していた。小児喘息であった深澤は、公害問題に関心が高かった。近くにある湊川は上流の宅地開発で水質が悪化して、ゴミも投棄されていて汚されていた。自然に関心を持っていた深澤は、自然保護や公害問題解決には何が必要か考えるようになった。1971年には環境庁が設置された。神戸市はその当時緑化に力をいれており、公園の整備も熱心だった。深澤は、緑豊かな憩いの場や子どもたちの遊び場として利用される公園をはじめとする環境整備に関する業務を行う仕事につきたいと考え、農学部園芸学科で造園を学べる大学に進学することを目標とした。

高校3年になり、受験が迫ってきた時に、「これから人生をどう生きるのか」という問いを持ち始めた。それまで読書をあまりしていなかったが、急に本を読むようになった。深夜放送を聞いて受験勉強をするという時代だった。ラジオの「テレフォン人生相談」のパーソナリティーをしていた加藤諦三氏の本などをよく読んでいた。人生論に関わる内容に関心を持った。

(2) 香川大学農学部へ

1973年4月香川大学農学部園芸学科に入学。高校までの勉強をする大きなモチベーションはいい点数をとることだった。理科系の教科にはおもしろさを感じたことはあったが、勉強が好きだ、もっとやりたいとは思っていなかった。高校までの勉強は、先生の話聞き、ノートに書き、それを覚えるののだと思っていた。勉強は暗記力だと感じていた。

受験勉強から解放されて、色々なジャンルの本を読みたいという思いが高まった。時間があれば、大学の図書館に行った。図書館に入ると知らない本がずらりと並んでいる。高校までの勉強はほんの一部分だけの勉強だったのを痛感した。自分の無知が可視化された。大学生協の書籍コーナーや高松市にある本屋にも大学の帰りに寄って、気になる本を手あたり次第読んでいった。自分が大学に入って学びたいと考えた植物学、生態学、造園学だけでなく文学・哲学・社会学・経済学などできるだけ幅広いジャンルの本を読もうと意識した。深澤は親元から離れ下宿する環境の中で、高校までの自分を変えたい、成長したいという思いが強くなっ

た。精神的自立を模索した。本を読むこともその1つであった。高校で部活をしてなかったので、硬式テニス部に入部したが、中学校では軟式テニス部だったので、軟式と硬式との差を感じて、一年で部を離れたが、その後、農学部にあるサークルの自然科学部に入部した。植物、昆虫の採集と観察を軸とした活動をしていた。自然科学部で屋久島に合宿に行った。屋久島への旅で、日本の自然や社会をほとんど知らないことを痛感する。世界や日本についての見聞を広めることが自分の成長になると考えていた深澤は、休みを使い、沖縄など自分がまだ知らない土地への一人旅を始めた。沖縄旅行(沖縄本島、石垣島、西表島)は、自生するヒルギやヘゴなどの南方の植物の観察が目的だったが、他にも多くの示唆を受けた。深澤が沖縄に行ったのは、1975年で沖縄返還があった、3年後だった。返還はされたが、右側通行だった。沖縄の戦争遺跡や、嘉手納基地の長く続くフェンスを見て、高校までの教科書の上での知識でしか知らなかった現実の姿を見て、自分の無知さ加減を自覚化させられることとなった。

香川大学では、カリキュラムの中に「自主ゼミ」という講義が、これまでのゼミナール活動の先達の努力により、設定されていた。窓口の大学教員は決まっているが、講義はなく受講学生がテーマを決め、調査研究し報告書にまとめ、提出することで単位がとれた。農学系ゼミナールの役員が、自主ゼミの設定や、北海道別海町への酪農実習の企画などを行っていた。深澤は、大学3年の時、自主ゼミという講義を受講した。高校までの勉強とはまるで違う。担当の教授はアドバイス程度でほとんど学生の意見ですすんだ。あでもない、こうでもない受講生で話し合い、学習し、一定の解決をして成果を出す経験が楽しかった。先輩から日本農学学生ゼミナールや西日本農学系ゼミナールの大会への参加を誘われた。農学関連に関するゼミナール活動の連合体である。香川大学農学部ゼミナールの委員長として京都大学・鳥取大学・島根大学など西日本のゼミナール活動をする仲間と出会う中で、視野が広がっていった。

4年生の時に造園学研究室に所属した。高校までは、個人の勉強が中心だったが、自主ゼミを通じて仲間と共に学ぶ重要性を深澤は感じていた。高校までの学習観が転換しはじめていた。研究室のゼミでは、ゼミ生同士の議論や話し合いの時間があつた。特に1人のゼミ生とは、同じ神戸出身ということで気が合って、造園についての意見交流をした。自分が勉強したこと分からないことを出し話し合った。意見を出して議論することで自分1人で考えていたのでは見つからない、新しい発見や考えが浮かんできた。仲間と一緒に学習することの素晴らしさを体験した。

1973年深澤が大学に入学した年に「オイルショック」と言われる事件が起こった。10月にイスラエルとアラ

ブ諸国による4度目の戦争である第4次中東戦争が勃発し原油価格が上昇した。10月下旬に大臣の発言をきっかけに「紙がなくなるらしい」という噂が全国に広まったと言われる「トイレットペーパー買占め騒ぎ」が引き金になって、洗剤、塩、醤油までもが小売店の店頭から消えることになった。急激なインフレは経済活動にもブレーキをかけた。

深澤は、大学で学んだ造園や緑地公園の知識を生かして、神戸市の公務員試験をめざしていた。当時神戸市は、緑地公園整備に力を入れており、香川大学の造園研究室の卒業生も神戸市に採用されていた。しかし、経済活動の変化もあったのか、深澤が3年になった時には、採用が激減した。公務員を目指していた深澤は、進路変更を余儀なくされた。大学入学の時に、先輩から農学部でも、高校理科と中学校理科の教員免許を取得できることを教えてもらい、教員免許に必要な単位はとっていた。そこで、造園会社に就職するか、教員をめざすかの選択に迫られた。

ゼミナール活動を通じて、自分の興味のある勉強(学問)をすることのおもしろさを知り、教育に関心を持った深澤は、次の世代の子どもたちに「勉強って、楽しいよ。おもしろいよ。友達・仲間と一緒に勉強するとより深まるよ」ということを伝える仕事につきたいと考えようになった。学校現場のことも教育についても、広く知っているわけでもない中での進路選択で典型的な「デモシカ教師」だった。(深澤)

(3)誕生から大学時代までの深澤の成長とその特徴

深澤の誕生から大学時代までのライフヒストリーを誕生から高校時代までと大学時代とに2つに区分して、後の小学校教師につながる人生経験を検討してみよう。

まず第一に、誕生から高校時代までの深澤のライフヒストリーの特徴を見てみよう。一つは、深澤が生まれたのは湊川商店街の近くの庶民的な地域であったという。専業主婦だった母親は、しつけには厳しかったが、小児喘息で体調を崩しやすかった幼い深澤に対しては、体のことを気遣う優しい母親であったという。また、印刷会社に勤める父親は、休みの日には池や河、海などに連れて行ってきて、自然と親しむ機会を多く創ってくれ、そのことが生き物への関心を育てていった。深澤は、このように古き日本の良さがまだ残っているような地域で、両親に大切に育てられたことが見て取れ、これが深澤の人間としての温厚な性格を形作ってきたのではないかと思われる。また、中学校から大学に至るまでの自然や生き物、さらには自然保護や公害問題に対する関心の深さは、父親とともに自然のなかを探索した経験が、いわば原体験となり、深澤の人格の中核を生み出してきたということができないのではないか。

深澤にとってこの時期のライフヒストリー上のいま一つの重要な経験となっているのが、教師としてのロールモデルになった担任の教員との出会いである。それは、小学校3年生の時の担任で、20代の若い先生だった。この担任の教師は、クラスのどの子からも慕われる先生で、休み時間は子どもと一緒に遊ぶなど、いつも活動をともにしてくれるような人であったという。しかし、同時にいじめなど子どもの人権を否定したり、不正義に対しては、激しく叱責して、そのことの意味をきちんと教えてくれる教師でもあったのである。教師のなかには、教師になるまでの小学校から高校までの間に、あんな教師に自分もなりたいたいと思わせるような教師との出会いがあって、それを教師としてのロールモデルにして、それに向けて教師のための学びを積み重ねていく者が多いが、深澤もまたこうした教師と出会えた幸せな幼少期だったと言えるだろう。

最後に、深澤のこの時期のライフヒストリー上の3つ目の重要な出来事は、小児喘息に苦しんだという経験も関係したように思われるが、人間はどう生きるべきかという人生論的な問いを持ったことである。ラジオ放送で出会った心理学者の加藤紘三氏の影響も合ったかと指摘されているが、こうした倫理的性格とも言うべき深澤の特徴は、教師になって以降も、教師としての自分の生き方を常に問い続けるという形で、深澤の人格形成に大きな影響を与えていくことになる。

それに対して、第二に、深澤の大学時代を見てみよう。先に見たように、深澤は、自然や生き物への興味関心から出発して、さらには自然保護や公害問題などに高校時代には関心を深めていったのであるが、それが香川大学農学部園芸学科に進学することにつながった。そして、硬式テニス部を経て、農学部のサークルである自然科学部に所属することになり、植物、昆虫の採集と観察を軸とした活動を展開して、科学の基礎とその方法を学んでいく。また、この時期の深澤は、興味関心のあった植物学、生態学、造園学だけでなく、文学、哲学、社会学、経済学など、幅広いジャンルの本を網羅的読んだのだという。ここには、受験勉強とそのための暗記を中心としたこれまでの自分の学びのあり方について批判的な省察が進行し、「世界や日本についての見聞を広めることが自分の成長につながる」という学習観を獲得しつつあった。つまり、「精神的自立」を目指した「自分くずしと自分づくり」⁵⁾(竹内常一)を意識的にか無意識的にか遂行していた時期だったのである。こうして、深澤は一人の自立した人間を目指す本格的な青年期を迎えたのである。

こうした自立した人間としての青年期を迎えつつあった深澤は、大学の制度的な枠だけの学びでは飽き足らず、従来の大学の制度的な学びを突き破る可能性を持っていた香川大学での実験的試みであった「自主ゼミ」に取り組んだり、全国の大学の連帯のなかで行わ

れていた日本農学学生ゼミナールや西日本農学系ゼミナールの大会などに参加して、全国の多くの仲間とのつながりを深めていくことになるのである。こうした組織や運動との出会いと参加は、教師になってからの教師の自主的に行われている民間教育研究運動への参加にもつながっていったのではないかと思われる。(船越)

3. 第2期 教師としての力量形成と模索期 (1977年～1984年)

(1)有馬中学校 1977年～1978年

深澤は大学を出て、中学校の教師の試験を受けたが、結果は不採用。後日、委員会から数学の非常勤講師を打診され、神戸市立有馬中学校に勤めることを決めた。中学一年生の4クラスを担当することになった。

最初の仕事は、小学校の計算力調査だった。中学校に入学した1年生の学力実態の把握のためであった。小学校1年生の2+3というたし算から小学校6年の問題まで学年10問ずつ、計60問の計算の問題を中学一年生にさせた。深澤は教育の知識が乏しく、「なぜ中学生に小学校の計算をさせるんだらう。小学校の計算はどの子もできるはずではないのか」という疑問を持った。しかし丸つけをされていて愕然とした。3、4年生の計算からできない子が激増。九九が全減の子もいた。「えー。小学校の計算がこんなにできないのか」と認識の甘さを突き付けられた。その時期に岸本裕史が雑誌『教育』に書いた文に出会った。

「1971年に小学校の教科書が改訂されるまで私は、ひとことでいえば『のびのび教育』をしていました。宿題もほとんど出さず、小さい小学生では人格の発達が大事だし、しっかりと遊ばせて、体力や気力をしっかりと培っていくことを重点にしてやっていったのです。そして、それなりの効果はあったと思います。ところが1971年に改訂された教科書の中身が非常にむずかしくなっている。1971年から担任した子どもには、このまま『のびのび教育』をやっているには目に見えてドロップ・アウトすることはわかりきっている。そこで、その年からもった子どもにはそれ以前とは違って変わって、宿題も出しますし、基本的な読み・書き・計算の力はきちっとつけなくてはいけないと思って、まるで人が変わったみたいに子どもたちに力をつけるために専念したわけです。」⁶⁾ 受けもっていた中学1年生は改訂された教科書で小学校時代学習してきた。

4月の終わりごろのある放課後に、Tという生徒が、職員室にきた。計算力テストで3年生からの問題がほとんどできてない子だった。Tは小学校から計算を復習するので、教えて欲しいという申し出だった。Tは3月までほぼ毎日小学生用のドリル『わかるさんすう』を解いてきた。放課後に、深澤は分からない問題を職

員室で教えた。3月の終わりに、深澤が自分の受け持った4クラスの生徒に再度計算力調査をして、伸びを確かめた。小学校から復習したTは点数が伸びていたが、他の子の計算力は4月と同じであった。毎日の学習の積み重ねで計算の力がつくこと知り、小学校での計算力の理解と習熟の重要性を感じた。深澤は「Tは私の教師開眼の恩人である」⁷⁾と述べている。

(2)唐櫃小学校 1978年～1982年

深澤は次の年の1978年4月に助教諭として唐櫃小学校に赴任した。六甲山の北側にあたり、山を切り開いて造成した団地の中の学校だった。歴史は古く1873(明治6)年に多聞寺の境内に開校した。校区には田圃が多く点在していた。

1年間仏教大学の通信課程で小学校の免許を取得し、次年度に正採用された。農学部出身の深澤は、教育のことをよく知らず、教師生活のスタートは劣等感と成長したいという渴望感でいっぱいだった。教育学部を卒業した同期の先生に遅れをとっている意識があった。中学校勤務の3月に、生徒に「深澤先生について」という感想文を書かせた。三上満氏の著作に影響を受けた。「私は、私自身の自信のなさもてつだって、生徒が私の教育をどう受けとっているかを知りたいと思い、よく感想文を書かせました。私の教育実践に、少しでも進歩のあとが見られるとすれば、その最大の原動力となったのは、生徒たちの発言や感想文による、私へのきびしい批判や年少者らしい言葉で表現された激励でした」⁸⁾を読み、三上満という優れた実践家も若い教師の頃、生徒の声を聞いていたことに共感し、模倣した。教師深澤への感想の内容は、「先生はまじめすぎる。もっと笑わせてほしい。やさしくて、わかりやすく教えてくれる。優しいのはいいが、びしっと怒らないだめだ」などが書かれていた。深澤は生徒の期待に応えられる教師の在り方を模索しはじめた。小学校に移ってからは、「教え子名簿」と名付けて、子ども自身のプロフィールと教師への感想とあわせ、3月末には、親にもアンケートをお願いし、一年間の学級経営の感想・意見・批判を書いてもらった。親が学校や担任にどういうことを欲しているか、願いを聞いた。親から学び、子どもから学んだ、同じ職場の教職員からも学んだ。教員だけでなく、給食の調理師さんや管理員さんからも多くのことを学んだ⁹⁾。教師としてより成長するためには、もっと広い場での学びも求めた。職場外のいろいろなサークルに行った。日本作文の会、仮説実験授業、科教協、数教協、歴教協、全生研、文芸研、法則化、書店・出版社や組合主催の教育講座にも足しげく通った。職員室の研修のお知らせの黒板に掲示された教育委員会主催の研修や研究校の大会にも内容を選んで参加した。

民間の研究会が活発に活動している時期だったので、

それぞれの研究会が発行していた雑誌や教育書を発行している出版社の雑誌も購読した。給料のかかなりの部分を雑誌や教育書の購入費用、研究会への参加費用に使った。夏休みには、リュックを背負って、二週間ほど、研究団体の夏の研究会のはしごもした。教育分野ではない人の講演会にも足を運んだ。教育以外の人の話を聞くことは、新しい視点や発想を教えてくれた。一流と言われる人の話は示唆に富んでいるし、話の組み立て方・聴衆の心をつかむ話術などで多くのことを学べた。また学んできたことを職場の若い先生と交流をした。お互いの「学級通信」や「一枚文集」を交換し、刺激を受けた。子どもから学び・親から学び・人から学び・本から学ぶ日々を過ごしていた。

1979年小学校教師として正式採用された年に、岸本裕史氏が主宰するサークル「北区教科研」に参加するようになる。岸本裕史氏の著書『どの子ども伸びる－教師と親でつくる教育－』¹⁰⁾を読んで、岸本氏の下で学びたいという思いがあった。唐櫃小学校には神戸電鉄で通勤していたが、自宅に帰る途中の駅から近い学校に岸本氏は勤務していた。

(3)北野小学校 1982年～1984年

4年間の唐櫃小学校勤務後、転勤で1982年4月に中央区の北野小学校に転勤した。神戸市の中心三ノ宮駅の周辺や異人館街を校区に持つ学校だった。1908(明治41)年に開校した。校舎は1931(昭和6)年に建てられた鉄筋コンクリートのモダンなデザインであった。神戸大空襲の戦火も潜り抜けた校舎だった。一年目5年生を担当した。校区の立地から子どもの家庭環境・国籍も多様だった。北野小学校転勤後も、家族の理解を得て、時間を作り、各種の研究会や講座にも参加していた。

北野小学校は国語の研修が中心だった。週一回の研修は、文学の授業研究。一年間の間に全員が国語の授業をする。そのための指導案検討が行われた。教材分析から発問、指示、板書の研修。一つの発問をめぐって、一時間ぐらい話し合いが続くことがあった。前任校は、若い先生が多く研修も深く行われていなかった。先輩の先生方の話し合っている内容についていくのに必死だった。「なぜ、深沢さんはこの発問にしたんだ。どういう意図なんだ。授業を通して、子どもをどう育てようとしているのか」など厳しく、温かく指導された。同僚の先生などは答えられなく、涙ぐむこともあった。現在の学校での研修はそこまでの追究はないが、この時代ではよくある光景だった。先輩が学んでいる研究団体「垂水文学の会」にも参加し国語の授業の基礎、そのための学級づくりの大切さを徹底的に鍛えてもらった。

5年6年と持ち上がったが、学校での研修・学校外での学びと自分のクラスの実態との乖離があり、なか

なか学級経営がうまくいかなかった。A君という父親が欧州出身で母親が日本人の子がいた。家庭的に複雑で発達に課題があり時にパニックになる面があった。色々なサークルや職場の先生から学んだ学級集団づくりをやりとうとするが、問題をうまく処理できなかった。研究会参加で学んだ仲間づくり実践をして、クラスみんなで関わりながらA君を変えていこうとしたが子どもたちとかみ合わなかった。指導への反発が女子を中心に起こり、悩み苦しむ日々だった。色々な先生に助言をもらい卒業させることができたが、「仲間づくり・集団づくり」の本質を理解せず、研究会で学んだことの一部を模倣しただけだった。

深澤のそれまでの学びは、教育のことなどを教養や知識として知ることに主眼があった。クラスがうまくいかないという挫折を経験し苦境に立たされた時に、自分を見つめ、現場の実践と学びが一致して初めて教師という人間は変わっていくということを実感した。目の前の課題を解決するヒントを掴むために、人や本から学ぶことで様々な教養を得られた。

自分自身の教師としての学びの在り方に疑問を持っていた頃、参加していた岸本氏につながるサークルの先生に声をかけられた。私より十歳年上の先生だった。「深澤君は、色々な研究会にいて、学んで勉強していることは素晴らしい。でも、あれもこれもやって、自分の教育実践で一番の軸になっているものは何や？」と尋ねられた。その時に答えに窮した。その言葉を考えるうちに、「すごく素敵な実践は、切り花ではないか。とてもきれいだが、自分の教室という畑に植えると、少しの間はきれいに咲いてくれるが、根がないから、枯れてしまう。枯れてしまうから、また、次のネタを求めに行く。自分は土作りをしてこなかったのではないか。教師・学級という土を作ってなかった。元肥を入れ耕す。そして、種をまいて、水や肥料や日光をやって、はじめて子どもというものが生きていくんじゃないか」と思い至った¹¹⁾。

(4)有馬中学校から北野小学校前期での実践の特徴と教師の成長

香川大学を卒業するに当たって、大学で学んだ造園に関わる知識を活かして、神戸市の公務員受験を考えていた深澤だったが、オイルショックの影響による採用予定者の激減で進路変更を余儀なくされ、中学校の採用試験を受験したが、あえなく不採用。その後、教育委員会から打診があり、中学校の数学の非常勤講師として、教師人生をスタートさせることになった。神戸市立有馬中学校に着任し、中学1年生の4学級を担当した。ここで、深澤は彼の教師人生を大きく変える生徒であるTとの出会いをすることになる。深澤のライフヒストリーの第二期の1つ目のポイントである。Tという生徒は、計算力テストでは小学校3年生から

の問題はほとんどできないという学習に課題が残されている生徒だった。深澤は、この生徒に1年間ほぼ毎日数学教育協議会(数教協)が開発した教材である『わかる算数』を使って補習を行った。すると、大きな学習課題を抱えていたTも大きく点数を伸ばしていったのである。ここから、深澤は後の落ち研(学力研)の学習のモデルになる毎日の学習の積み重ねが計算の力を伸ばすということに確信を持つに至る。だから、深澤は「Tは私の教師開眼の恩人である」と述べ、子どもから学ぶ教師へと成長していく転機となっていったのである。

1年間の助教諭を経て、翌年小学校教諭として正式採用された深澤は、教師人生としてまた大きな転機を迎えることになる。深澤は確かに正規採用されたが、非教員養成学部出身ということもあり、他の教員養成学部の若手の同僚と比較すると、教育的な知識の不足が教師としての大きなコンプレックスになっていた。深澤はこうした教師としての自信のなさやコンプレックスをマイナスに受け止め、逃避行動へと自らを落ち込ませていくのではなく、学びの機会を積極的に求めて、自らを成長させようとしていった。特に、当時活発に活動を展開していた民間教育研究団体の様々なサークルに出かけて行き、教師に必要な学びを貪欲に行っていた。いわば「サークルめぐり」を通しての教師の自立である。これが、深澤のライフヒストリーの第二期の2つ目のポイントになっている。そして、同時に、深澤の教師として、教育実践研究者としての幅広い知見と洞察力は、こうした若手教師時代に、教師として求められる「共通教養」として形成されたものだと言える。そして、こうしたサークルめぐりのなかで、深澤の「生涯の師」となる岸本裕史との出会いも行われることになるのである。

1982年に神戸市立北野小学校に転勤することになった深澤は、教師のライフヒストリーにおけるさらなる転機を迎えることになる。それもまた、子どもとの関係の問題であった。A君という子どもは、父親が欧州出身で、母親が日本人という子どもだった。発達に課題があって、パニックになるようなこともあり、深澤は学級経営に大きな困難を抱えることとなった。多くの先生方に支えられて、何とか卒業させることができたが、このことからこれまでの教師としての学び方にある課題に深澤は気付かされることになった。それは、恩師の岸本裕史につながるサークルのある教師から、多くのサークルめぐりをして、学ぶことの意味を評価しながら、しかし、学ぶ主体の深澤自身に軸があるのかという指摘は、深澤をしてこれまでの教師としての学びが様々なサークルで蓄積されてきた知識の習得に過ぎず、教師として教育実践を構築していく際の土台、ないしは基軸となるものの不在を鋭く自覚させるものであった。教師として、人間としての生き方にもつな

がる土台や基軸のない学びは、寄せ集められた知識の集合でしかあり得ず、それは子どもと真正面から向き合う教師の力を育むものにはならない。こうして深澤は、教師としての自らの軸を明確にするために、岸本裕史からさらに多くを学んでいく道を選択することになるのである。こうした岸本が主宰する関西落ちこぼれをなくす研究会への参加を画期として、第2期は終わりを迎え、第3期の教育実践の「定型」の成立期がスタートすることになるのである。(船越)

4. 第3期 教育実践の「定型」の成立期 (1984年～1997年)

(1)北野小学校 1984年～1986年

北野小学校の3年目に5年を担任した。昨年度までの5、6年の失敗を糧にしてリベンジと同時に深澤は、自分自身が変わらないといけないう思があった。樹木には幹があって、枝が分かれているように、落ち研の実践(読み書き計算の理解と習熟)を幹にしよう。そして、色々な研究会からも学ぶことは続けよう。学んだことは枝に接ぎ木することになるんだと位置づけた。そのことで、幹を太らせると共に、接ぎ木した枝からも豊かな花が咲いたりするのではないかと、捉えることにした。教師の意識と実践の「在り方」が定まった

岸本実践を一からきちんと学ぼうと決めた。岸本氏から教師の成長のための学び方を教えてもらった。岸本氏は、本を読んだ後に、気になったところを写したり、自分の感想などの思索をルーズリーフのノートに書いて、ファイルにとじ込んでいた。「僕が本を書けるのは、このノート勉強を十年続けたからだよ。今もやっているけれど、二十代から三十代にかけて毎日書き続けたことが財産になっている」と教えてもらった。深澤が一番目に始めたのはノート勉強である。次の日に、文房具店にいて、ノートとファイルを購入した。岸本氏ほどの量はできなかったが、ノートにまとめる勉強をこつこつ始めた。読んだ本やサークルや講座で学んだことを書き記した。

二番目にしたことは、岸本氏が最初に出版した『どの子ども伸びる』をノートに視写した。文章修行には最適だと教えてもらっていた。岸本氏は、若い頃志賀直哉の文章を視写したという。続けて、岸本氏の『どの子ども伸びる 家庭篇』・『同 教師篇』も視写をした。

三番目にしたことは、深澤自身の授業や教育研究会の講師・教育外の著名な講師などの講演・講座のテープ起こしだった。テープ起こしをしていると自身のしゃべる言葉のくせや無駄な言葉が多いことに気がついた。優れた先生の講座や各分野の一流の講師は、話の構成・豊かさや人を惹きつける笑いも含む話術の巧みさがあった。繰り返し聞き、文字化することで、話の奥にある考え方を知ることができた。

四番目は、実践記録を毎回の例会に必ず報告し、岸本氏はじめ、参加者に意見感想をもらった。1985年、落ち研(学力の基礎を鍛え落ちこぼれをなくす研究会)設立に参加し、落ち研の全国大会や各種研究会で実践を発表していった。落ち研の地域サークル(神戸おもちゃばこ)での仲間、落ち研での先輩や後輩など、自分より上の世代だけでなく、同世代、下の世代との交流や刺激のし合いは、深澤の実践家としての成長に大きな役割を果たした。実践し、報告し、反省し、またテープにとって、改善することを続ける日々が二十代の修行だった¹²⁾。

学力の基礎である「読み書き計算」の実践を中心に5年6年と2年間実践した。読みは、音読・読書。書きは、鉛筆の持ち方指導から文字指導・視写・作文。計算は、百ます計算・わり算指導をさかのぼって指導した¹³⁾。鉛筆の持ち方については、落ち研の会員であった高嶋諭氏から多くを学んだ¹⁴⁾。

6年担任時に、歴史研究論文への挑戦を試みた。岸本氏の『どの子ども伸びる』に「魅力ある授業 こどもの納得する評定を」という項があり、6年生の研究レポートが載っていた。「北条政子の一生」6年生三村祐子さんの作文。原稿用紙でいうと五十枚ぐらいいある「小学生でここまで書けるのかと驚き、憧れと共に自分もこんな実践をやってみよう」という実践目標が生まれた。大学での卒業論文の書き方を思い出し、子ども向けの作文の書き方の本、大学で読んだ論文の書き方の本などを読み直して、計画をたてた。深澤は、「原稿用紙三十枚の論文を書くこと」をめあてに、6年児童が取りくんでいけるように、4月から準備を行った。

第一は、本を読む習慣をつける。岸本氏から、「論文を書かせた時は岩波新書を読む子もいた」と聞いた。6年生で岩波新書はかなりのレベルなので、4月から本を読む取り組みをし、2学期には、大人が読む小説を読む子もでてきた。論文を書く時にも、岩波新書を参考にする子もいた。

第二は、書く力をつけることだった。4月から文を書き慣れるようにしていき、日常的に授業の感想やミニレポート、週に一回は作文を書かせることを心がけた。夏休みには、戦争中のことについて祖父母に聞き取り調査をさせた¹⁵⁾。その頃の6年生の祖父母はほとんどが戦争体験をされていた。聞いたこと、思ったこと、もっと聞きたいことを原稿用紙にまとめていった。たくさん書いた子は十枚を超えていた。

原稿用紙に書く時には、丁寧な字で書くことも要求した。論文というのは、人に読んでもらうのが前提なので、普段から連絡帳やノートを丁寧に書かせることや、書写の時間にはひらがな・カタカナ・漢字の字形指導を加えていった¹⁶⁾。

(2)福住小学校 1986年～1993年、

北五葉小学校 1993年～1997年

神戸市の中心街での人口減が急速に進み、北野小学校でも学級数が減り、4年間で福住小学校に転勤となった。転勤した福住小学校は、王子動物園が近くにあり高校などの教育機関が多くある地域だった。福住小学校も歴史がある学校で、設立年は1932(昭和7)年。地域の方の学校に対する思いが強い学校である。北野小学校の後半2年間で、落ち研実践に手ごたえを感じた深澤は、実践を深め、広げることを意識し始めた。赴任した福住小学校の教頭先生からは、「腰骨をたてる」(立腰教育)「しつけの三原則」などの森信三氏の実践を紹介された。深澤は、腰骨を立てるということを学習における姿勢指導と捉え「読み書き計算」の実践の中に組み込んでいった。北野小学校の運動会では、民舞を実践している先輩がいた。その時に学んだ「ソーラン節」を転勤した福住小学校で実践した。

民舞とは、「各地域で親しまれている踊りや日本の代表的な民踊」である。民俗舞踊という身体表現活動として学校教育に活用する場として、運動会で行った。低学年では「春駒」高学年では「みかぐら」にも取りくんだ。民舞を踊ることで、その土地の人々の暮らしの中から生まれてきた歴史や文化を感じ、日本の踊りの中にあるリズムや音を感じて、仲間と共に作りあげる楽しさを子どもたちに味わわせたいという思いで、深澤は実践した。

新卒以来続けてきた、学年末の親へのアンケートでは次のような感想があった。「一年間、大変お世話になりました。「お母さん、担任だれと思う」と息を切らせながら走って帰って来て、『びっちり深沢マンやで』と言ったことが昨日のこのように思い出されます。旧6年生の諸先輩の方から先生の事に関しては『深沢マン』と恐れられ、ずっと一年生から聞かされてきましたので、2年生になった当初は、A子にとっては緊張の連続でした。深沢先生は先輩達と同じ様に小さいA子達にも、容赦なくびびりと教育して下さいました。そして、親の心配をよそに、A子もいきいきと、その時、その時の課題を目標に向かって淡々とこなしているではありませんか。百ます計算、漢字の関所、運動会の春駒等、子ども達もがんばった思い出でいっぱいだと思います。先日、漢字のテストをもらって来ました。145問中『考える』の送りがなを間違えただけで、あとは全部正解でした。この結果を見て、家族全員で喜び、あきらめていた勉強も『やればできる』と教えられました。(後略)」

福住小学校に転勤して、2人目の子どもが誕生し、自分の子どもからも多くのことを学ぶことができた。教師は学校では「先生」だが、家に帰ると、ただの「お父さん」「お母さん」。

子どもが保育園に通っている時、夜の寝るときに添

い寝をしてくれとせがまれた。疲れている体を横にすると睡魔がおそってきた。適当にふとんの上から胸のところをトントンとたたいていると、「それじゃあ、ダメ。ふとんの上からやったら、気持ちを通じない」と言う。ふとんの中に手を入れて、直接トントンとして欲しいという。疲れているし、早く寝てくれたら、仕事をしようと考えていたので、事務的になっていた。それを子どもに見抜かれた。子どもは、親とのつながりを求めているし、自分に対しての思いが向いているかどうかを鋭く分かる。わが子から教育の重要な部分を教えてもらえた。

落ち研が結成された1985年の結成総会の参加者は65名だったが、1986年の全国大会で360人の参加者があり、広がりを見せた。深澤は全国大会や地域集会には、毎回参加して、レポート報告も続けた。「読み書き計算の理解と習熟」「どの子にも確かで豊かな学力」をいう落ち研実践を軸に据えて福住小学校での7年間の実践を積み重ねた¹⁷⁾。1993年には北五葉小学校に転勤した。その翌年、結成して9年目の落ち研の事務局長に選出されて企画運営の中心となった。「読み書き計算の理解と習熟」という落ち研の実践のベースにしながら、実践内容的にも組織的にもよりウイングを広げようと深澤は考えた。1995年には、脳科学者の久保田競氏を記念講演者に招いたり、96年は北海道集会を開催し、野口芳宏氏の登壇を実現したりした。

北五葉に転勤してからも、「読み書き計算」の実践を中心とした落ち研実践を続けた。2年目は5年生を担当した。年がかわり3学期。1995年1月17日の早朝午前5時46分にマグニチュード7.3の兵庫県南部地震が発生した。阪神・淡路大震災という大災害が発生した。学校は休校となり、兵庫区に住んでいた深澤は交通機関が使用不能になり、学校に出勤できない日が続いた。北五葉小学校は、六甲山系の北側にあるため、大きな被害は免れた。しかし、昔ため池であったあとに作られたプールは真っ二つに割れ、水漏れを起こした。学校に子どもたちの声が聞かれない日々が続き、学校とは何か、教育とは何かという「問い」を震災は、深澤に突き付けた。(深澤)

(3)北野小学校後半・福住小学校・北五葉小学校前半での実践の特徴と教師の成長

教師としての軸のなさを自覚した深澤は、関西落ちこぼれをなくす研究会に参加した北野小学校時代の後半の約2年間から、徹底して岸本裕史の実践から学ぶことを追究した。そして、そのことを通して、教育実践の「定型」¹⁸⁾(稲垣忠彦)を確立することを志向した。岸本からの学び方は、徹底していた。第一は、岸本が本を読んだときにルーブリーのノートに記録していくという岸本の学び方を模倣したのである。このことは、若手教師だった頃は教師の足腰を鍛えるという意

味で、より大きな意味を持ったと思われるが、同時に、この時に身に付けた学びのスタイルは、現在の深澤にとっても身体化され、日常的な学習のスタイルになっているのである。少しでも深澤とともに学んだ経験を持つ人は、深澤はどんな時でも学んだことをノートに取り、それを自らに活かしていこうとする学びに対して貪欲であり、同時に謙虚な姿勢を持った人であることをすぐに想起するだろう。岸本からのこうした学び方を学び、継承したことが今日の深澤を形成していることは間違いないだろう。

第二は、岸本が自らの教育実践の「定型」を確立したと言われている『どの子も伸びる』3部作を視写したことである。深澤は、こうした営みを岸本の指摘に基づいて、文章修行と指摘しているが、筆者はそれだけに留まらないと考える。文章を視写するという営みは、視写するプロセスで、文章を対象化し、より深く内容を考え、吟味する学びにつながっていく。だから、深澤は視写しながら、岸本の文章の意味を考え、岸本と対話することを通して、誰よりも岸本の言いたかったこと、考えていたことを理解することに誘われたのではないと思われる。深澤は、視写と併せて、テープ起こしを積極的に行った経験を述べているが、これも視写と同じような機能を果たしたと言える。もちろんこれらは文章修行の役割も果たしたが、ある意味では岸本以上に岸本自身の教育実践の「定型」についての考え方を自分の問題、つまり、自らの教育実践の「定型」の確立の問題として引き取り、検討したのではないだろうか。だからこそ、こうした学びの経験が深澤をして、改めて岸本に大きく接近させるとともに、岸本の実践的成果を継承しながら、自らの教師としての成長の節目にしていった足跡が予想される。

第三に、この時期には、深澤にとってもう一人大切な人との出会いがあった。それは、福住小学校時代の教頭から紹介された森信三である。「腰骨を立てる」(立腰教育)や「しつけの三原則」などを学び、学習における姿勢指導と位置付け直し、「読み書き計算」の実践の中に組み込んでいったという。このような深澤の「生涯の師」である岸本の立ち位置からすると、その教育思想・哲学や教育実践観からみてかなり異なった分野の人からもよいものはよいと学ぶことができる深澤の謙虚さと思慮深さが、深澤の教育実践論の幅広さを創り出しているのだろう。なお、森信三からは、先に指摘した深澤の倫理的な性格から、森が主張する教師の生き方論などとも後に響き合うことになる。

第四に、自らの教育実践の「定型」を岸本裕史から深く学ぶことを通して確立してきたが、必然的にそのことに留まらず、岸本を中心として結成された落ち研の活動と運動としての発展に積極的にコミットしていくことになる。すなわち、落ち研という組織に緊密にコミットすることを通して、教師としてのさらなる成長

を図っていくという自立の戦略を採ったということなのである。(船越)

こうして精力的に落ち研の事務局長として活動を展開してきた深澤であったが、1997年8月に事務局長を退任し、これを画期として、第3期の終わりを迎えたと考える。

Ⅲ 課題

深澤の教師のライフヒストリーを、その前半生を対象にして検討してきた。深澤は一方ではその時々に出会った子どもと全力でぶつかり、子どもから多くを学んで成長してきた、「子どもから学ぶ教師」であった。このことが深澤をして、子どもから離反した教師としての自立の道を選択させなかった大きな理由になっている。教師は、様々な子どもと出会い、出会い直しを繰り返すなかで、教師としての力量形成をはかり、自立と成長を行っていく存在なのである。また、教育実践の軸、すなわち、その土台や基軸となるものは、「生涯の恩師」である岸本裕史が開発し、構築した「読み書き計算」の実践をベースに、自らの教育実践の「定型」を確立させていった。こうした深澤の教師のライフヒストリーを見てみたときに、以下のような4つの検討課題があるように私たちは考えている。

1. 非教員養成学部出身という来歴と教師としての成長の戦略

戦後の教員養成は、戦前の師範学校出身と大学出身との対立構造を引き継ぎ、教員養成学部出身と一般学部出身という構図があり、深澤は後者の一般学部、すなわち、非教員養成学部出身という来歴の位置づけになる。一般的に、教員養成学部出身の教師と一般学部出身と教師は、前者が教育技術の習得で教師としての自立を図り、後者は教養に裏打ちされた教科内容の深さで自立を図る傾向がある。こうした対立の構図からすれば、深澤は幼少期より興味関心を抱いてきた自然や生き物、さらには自然保護や公害問題などの教科内容の深さを武器に、教師としての自立と成長の戦略を採っていくことも可能であったように思われる。しかし、深澤はそうしなかったのであるが、それは一体なぜなのだろうか。

第一は、非教員養成学部出身だからこそ、教員養成学部出身者が持っている教職専門科目などを通して身に付けてきた教育学的教養や教育技術のなさに対する強烈なコンプレックスである。また、深澤の学ぶことに対する謙虚さや誠実さ、さらには、生き方をめぐる倫理的な性格ということも関係してくるだろう。さらに、教員就職にあたって、いわゆるデモシカ教師として出発した負い目も相まって、なおさら当時の民間教育研究運動などで研究・開発が進められていた教育科学を志向する教育学的教養や実践的な教育技術を自らも身

に付けるという方向に貪欲に歩ませることになったのではあるまいか。

第二に、深澤がこうした科学的な教育学的教養や実践的な教育技術を身に付けようとしたときに、それを支える人たちがいたということである。まず初任校で、教員養成大学出身の同世代の同僚がいて、ともに切磋琢磨して学び合うことができたことである。次に、深澤が「サークルめぐり」と呼ばれるように、積極的に多くに民間教育研究団体の様々なサークルに出かけ、自主的に自らの教育学的教養や教育技術を身に付けることを可能にするような場があったということである。

第三に、岸本裕史という「生涯の師」との出会いがあり、その岸本につながる先輩教師から、教師としての決定的な課題になる教育実践の軸の不在を指摘してもらえようという意味ある関係があったということである。同時に、深澤自身が大学時代の「自分くずしと自分づくり」を介した学びの転換があって、仲間とともに学び合うことの楽しさを知っていたことも、こうした支える人たちへの出会いを生み出した大きな要因になっているとも言える。

こうして深澤は、子どもから学ぶ教師として求められる教師としての見識や教育技術を我が物にしていくメインストリームに位置付けることができたのであるが、では、こうした教師としての学びは、教員養成学部を出身していれば不要だったのであろうか。そうではない。残念ながら、現在の教員養成学部の教員養成コアカリキュラムで学ばれている教職専門科目は、必ずしも学校現場の現実やそのニーズに対応したものばかりではないし、教育技術の習得はあまり大きなウエート占めていない。ましてや、教師に必要な暗黙知としての実践知は、学校現場で仕事をしながらでないと学べないものもある。その点で、深澤は、学校現場に入ってから教育学的教養や教育技術を学び直したし、岸本の存在も含めて、サークルなどで蓄積されていたいわば実践で検証済みのものを学ぶことができたのも、非教員養成学部出身の深澤に取っては大きな幸福であったし、開放性の教員養成の大きな可能性を示したと言えるだろう。(船越)

2. 教育実践の「定型」の確立と教師の「中年期危機」

深澤は教師のライフヒストリーを辿りつつ、検討してきたことからわかるように、岸本裕史とそのいわば同志の仲間との出会いを通して、読み書き計算を中心とした自らの教育実践の「定型」を確立してきた。こうした教育実践の「定型」の確立と実践的力量的形成は、デモシカ教師としてスタートした教師としてのコンプレックスを払拭させ、教師の仕事に自尊心を取り戻すことに成功したのである。そして、深澤はこうした教育実践の「定型」に確信を深め、岸本を中心に結成された「落ち研」にも積極的に関わっていくことになる。

ところで、どのような職業でもそうであろうが、とりわけ社会の影響のなかでも、そして、学び成長し続ける存在としても、子どもは常に変わり続けるので、それに応答して教師もまた学び続け自己変革し続ける必要がある。しかし、一旦確立した「定型」をずっとそのまま続ける教師もまた学校には存在する。このような教師は変わり続ける存在としての子どものずれを拡大し、いずれ子どもとの間で大きなトラブルを生むことになる。つまり、教師は、自らのライフコースにおいて中年期を迎えると、自らの教育実践をどのように発展させていくか岐路を迎えるのであり、そうした教師としての成長と教育実践をめぐる課題にうまく向き合うことができないと、大きな困難に陥ることにもなるのである。それが教師のライフコースで言うと、「中年期危機」と言われるものである。深澤も、第三期の北五葉小学校在職中には、40歳を迎えることになるが、まさにそうした時期を目前にしていたのである。

こうした深澤の「中年期危機」をめぐるのは、実は問題の所在で述べた教職員への管理・統制が強いと言われる神戸市の地域性が関わってくる。久保は、学級実践を中心に、自らが確立した教育実践の「定型」を、京都市立新林小学校や金閣小学校の職場の同僚の要求に基づく学校づくりの実践へと発展させるなかで、「中年期危機」を突破していった。(金閣小学校での1年間の休職はあるが)しかし、深澤が勤めていた神戸市は、こうした教育実践の外延を拡張していくと言う戦略(さしあたり、「実践の外延拡張」論と述べておこう)、すなわち、下からの学校づくりの実践を展開していく条件に恵まれているとは決していえない。それゆえ、深澤は別の戦略を立てて、「中年期危機」に陥らず、それを突破する方途を探る必要性があった。自らの勤務校という学校ベースの実践ではなく、3と4で検討するように、民間の研究会ベースで、教育実践の内容を発展させていく戦略(さしあたり、「実践の内包発展」論と述べることにする)を採用することに結果的にはなるのである。ただ、それは深澤が「落ち研」という民間の研究会に逃げたということではなく、学校ぐるみの取り組みの可能性を様々に探りながら、常に葛藤のなかにあつての判断だったと思われる。詳細は後編の論考でさらに詳細に検討していくことになるだろう。(船越)

3. 落ち研実践の拡充と発展と自己の実践との関わり

1994年8月の全国大会で深澤は落ち研の事務局長に就任した。代表委員として岸本裕史らはいしたが、組織の運営・大会などの研究会の企画立案は事務局長に任せられていた。深澤は岸本裕史が提起した、読み書き計算実践をより深く掘り下げることに、広げることを意識した。

先に紹介したように、1995年の全国大会の記念講演

者には、久保田競氏を招いた。岸本氏の本の中には、脳科学からの知見が多く見られる。岸本が拠り所にした脳科学の知識は、『脳の話』¹⁹⁾などの著者である時実利彦の著作だった。

岸本の理論を理解するためにも、また最新の脳科学の知識を得るために、時実利彦の弟子にあたる当時京都大学霊長類研究所教授だった久保田氏に登壇してもらった。1995年度の地域集会は、北海道で開催した。「授業で鍛える」などの著者である、野口芳宏氏を招いた。野口氏は当時発足した法則化運動にも関わっている方だった。野口氏の実践や主張は、落ち研の考えと共通する点が多く、野口氏から学ぶことで、落ち研の実践の深化や、集会への参加者が野口氏の登壇で増えることも考えていた。他の実践家や他のサークルから学ぶことを落ち研は発足当時から進めていたが、深澤はそれをより進めた。北海道集会を運営してくれた北海道の教師からは、「落ち研は深澤事務局長になって、新たな落ち研をつくろうとしているのを感じる」と言われた。実践の差異を見るのではなく、共通点や学べる点を発見し、落ち研の実践を豊かにする観点に関わりを持ってきた。仮説実験授業の板倉聖宣氏にも冬の研究会に登壇してもらった。板倉氏は習熟論・ドリル論を展開されており、その発想を学ぶことで落ち研の理論をより深めたいと考えた。深澤は事務局長として、運営に携わることで、落ち研実践を深めることと、他の研究団体の中心的な理論家・実践家を招くことで、その方の話を聞くことが目的であっても落ち研の集会に参加してもらい、落ち研を理解し知ってもらえる機会とし、参加者を広げることが意識した。事務局長深澤にとっては、落ち研の組織の拡充と発展が役割だった。同時に実践家深澤にとっては、教育実践の幅と視野を広げるきっかけとなった。事務局長として一流の講師と接することで大きな刺激を受けた。深澤自身の中で、新たな実践の萌芽のヒントを得ることができた。そして、小さな組織ではあるが、組織の長として、運営を担う常任委員・全国委員・会員を束ねる経験をしたことは、深澤を組織者として成長たらしめると共にその後の深澤の礎となった。(深澤)

4. 「組織への参加」と「組織からの自由」と教師の自立と

2で指摘した「中年期危機」の問題は、先に指摘したように、それをどのように突破するかという点から、「落ち研」という組織との関係も大きな関わりを持っている。深澤の場合、デモシカ教師からの脱却は、自らの教育実践の「定型」の確立によって実現したが、この教育実践の「定型」の確立は、岸本との学び合いの関係の深まりと、その岸本が中心になった「落ち研」という民間教育研究団体の組織に深澤が積極的に参加し、コミットしたことで可能になったということが出来る

だろう。つまり、「落ち研」という組織の活動と発展のなかに、教師としての深澤の自立と成長が織り込まれ、両者が同時相即的に実現されるという関係になっていたのである。

しかし、こうした組織と個人の関係が幸福な関係を築いている間はいいが、両者の間に何らかのトラブルが生じたり、あるいはマンネリ化したりして、組織の活動に教師としての魅力を感じなくなると、「組織からの自由」が希望となったり、それが教師のさらなる自立の条件になったりすることもある。

こうした場合、組織から離れてしまって教師としての自立を図るという戦略を採るか、逆に、組織そのものを常にマンネリとは対極になるよう若返らせ、魅力的なものにし続けるという戦略を行うか、深澤は教師のライフヒストリーの第3期の末期には、まさに教師人生の岐路に直面していたということが出来るだろう。つまり、「中年期危機」を回避するために、教育実践の内容を発展させることを通して「組織への参加」を強めていったのと同時に、こうした戦略の結果として逆に組織に囚われすぎると、それがまた「中年期危機」を呼び込み、「組織からの自由」を希求せざるを得なくなるというジレンマのなかに深澤はいたのである。まさに、組織との適切な距離感が問われていたのだ。こうした教師人生の大きな岐路を深澤がその後どのように歩いていったかについては、後編で引き続き検討を進めていく予定である。(船越)

注

- 1) 船越勝・深澤英雄 「岸本裕史のライフヒストリー研究 (I)ー基礎学力形成の教育実践の「定型」の成立過程を中心にー」『和歌山大学教育学部紀要ー教育科学ー』第68集第2巻、2018年、87～100頁、深澤英雄・船越勝「岸本裕史のライフヒストリー研究 (II)ー「見える学力見えない学力」という枠組みのライフヒストリー上の位置ー」『和歌山大学教育学部紀要ー教育科学ー』第69集、2019年、105～114頁、深澤英雄・船越勝「岸本裕史のライフヒストリー研究 (III)ー幼児教育と「見えない学力」の模索へー」『和歌山大学教育学部紀要ー教育科学ー』第70集、97～108頁、2020年、深澤英雄・船越勝「久保齋のライフヒストリー研究 (I)ー教育実践の「定型」の成立過程を中心にー」『和歌山大学教育学部紀要ー教育科学ー』第72集、2022年、深澤英雄・船越勝「久保齋のライフヒストリー研究 (II)ー学力づくりをテーマとした学校づくりの実践から若手教師の育成へー」『和歌山大学教育学部紀要ー教育科学ー』第73集、2023年参照。
- 2) 深澤英雄・船越勝「子どもたちの学力づくりを通じた学校づくりに関する研究ー久保齋と京都市立新林小学校の取り組みを中心にー」『和歌山大学教育学部紀要ー教育科学ー』第71集、93頁、2021年。
- 3) さしあたり、中内敏夫・川合章編『日本の教師6 教員養成の歴史と構造』明治図書、1974年、山田昇著『戦後日本教員養成史研究』風間書房、1993年などを参照されたい。
- 4) 深澤の主な著書・論文は、深澤英雄著『読みの力を確実につける』(明治図書、2002年)、同『学習指導要領2020実現のための新・教師力20』(小学館、2018年)、同『岸本裕史

- 100マス先生の遺言』(清風堂書店、2005年)、同『つまずきと苦手がなくなる計算指導－基礎学力をつけるワザコツヒケツ－』(清風堂書店、2011年)などの他、多数の計算プリント・漢字プリント・宿題プリントなどを出版している。また、こうした精力的に実践研究を進めてきた深澤についての先行研究はほとんどなく、教育実践研究や教育方法学研究のなかでは十分に位置づけられていない。唯一教師としての深澤やその実践の特質について分析したものと言えば、岸本裕史「学力研の群像」岸本裕史著『どの子ども伸びる算数力』(小学館、2003年)、重水健介「深澤実践に学ぶ」家本芳郎・日本群読教育の会編『いつでもどこでも群読』(高文研、2003年)があるのみである。
- したがって、こうした深澤に関する研究史上の空白を埋めるために、ていねいにインタビュー調査を行って、研究上の意義づけについての実践者の意識を聞き取る必要があった。それゆえ、深澤に対するインタビュー調査は、2023年4月12日、19日、26日、5月10日、6月7日の5回にわたって、20時間以上かけて行われた。
- 5) 竹内常一著『子どもの自分くずしと自分づくり』東京大学出版会、1987年参照。
 - 6) 岸本裕史「座談会 今日の基礎学力問題をめぐって」『教育』345号、国土社、1977年参照。
 - 7) 深澤英雄「基礎となる力を子どもたちに」『達人教師の20代教師のチカラ』日本標準、2015年、127～136頁参照。
 - 8) 三上満著『現代っ子の教師論』鳩の森書房、1969年参照。
 - 9) 深澤英雄「若い教師の学習法」『それ行け！学力づくりだ青年教師』あゆみ出版、1992年、167～181頁参照。
 - 10) 岸本裕史著『どの子ども伸びる－教師と親でつくる教育－』部落問題研究所、1976年参照。
 - 11) 深澤英雄「教師魂」『教師のチカラ』20号、日本標準、2015年、44～46頁参照。
 - 12) 深澤英雄「分数の計算は学力回復に最短の教材 計算の指導 高学年」『子どもと教育 9月臨時増刊号』あゆみ出版、1985年、126～132頁参照。
 - 13) 深澤英雄著『読み・書き・計算がっちり』第3章～第7章、あゆみ出版、1990年、47～154頁参照。
 - 14) 深澤英雄著『どの子ども伸びる さかのぼり指導のアイデア』小学館、2005年、44～57頁参照。
 - 15) 深澤英雄「作文指導のコツ」『子どもの書く力を伸ばすコツ 別冊教育技術'97 1月号』小学館、1997年、110～113頁参照。
 - 16) 深澤英雄「できる自信をつける歴史研究論文」『勉強好きな子どもに育てる』あゆみ出版、1986年、68～82頁参照。
 - 17) 深澤英雄「ぼくの・わたしの卒業論文」『小学校6年生の大研究』子どもの未来社、2003年、148～157頁参照。
 - 18) 稲垣忠彦著『明治教授理論史研究－公教育教授定型の形成－』評論社、1966年参照。
 - 19) 時実利彦著『脳の話』岩波書店、1962年参照。